

大阪体育学会 50 周年大会を振り返って ―イベント部会の立場から―

新宅幸憲

いま振り返ってみるとあつという間の 3 か年であった。まず 50 周年準備委員会が発足した。その後、実行委員会へと移行した。リーダーシップを発揮される大会会長の後藤幸弘先生。エネルギーに動かれる伊藤章先生。そこに力不足の私がイベント部会長である。どこから手をつければよいのか。しかし「何が何でも」やらねばならぬ。なにわのスポーツのため。‘なにわのスポーツをひもとく’というテーマが頭から離れない日々が始まった。定例の理事会の前に大阪体育大学の会館アネックスにおいて第 1 回の会合がもたれた。その中心は、武智英裕先生であった。企画の素案づくりから始まったように記憶をしている。私の提案は、関西出身の、著名なスポーツ関係者を講師として招聘し、スポーツ教室及び講演を開催することであった。その会場としては、関西大学を提案した。講師の候補はシドニーオリンピックのメダリスト、シンクロの名コーチ、プロ野球選手、ラグビーの選手、サッカーの解説者、剣道の師範、若手のスケーター等々であった。それらの名前をあげると、「本当にできるのか」、「大風呂敷」とも揶揄された。候補者一人一人に当たってみたが、謝礼はタレント並であり、日程調整で折り合いがつかず断念をした。そのうち、頭に浮かんできたのは、朝原宣治選手であった。理事の先生方の推薦もあり、有力な候補者として絞られてきた。朝原選手にどうコンタクトをとるのか、同志社大学の富井富先生を介して、同大陸上関係者に仲介の労をとっていただいた。いまや朝原選手はなかなかの売れっ子であり、イベントへの参加は難しいとの話であった。大阪ガス（OG）の朝原選手のマネージャーと接触したり、日本体育学会広島大会では、直接朝原選手に依頼したりして、あらゆる手を尽くした。何とか日程調整ができ、謝礼面でも承諾を得られた。何度かお会いするうちに私は朝原選手のファンになったりした。真摯なアスリートであった。イベント間近になり、大阪ガス本社まで打ち合わせに近畿大学の熊本和正先生が同行してくれたのが忘れられない。トランポリンのお二人上山容弘氏、廣田遥氏も多忙であった。特に海外遠征の多い廣田遥氏とは、阪南大学のトランポリン関係者各位のご尽力により連絡をとることができた。

次はシンポジウム I 「なにわのスポーツをひもとく―実践活動の歩みを語る―」である。詳細は、伊藤章先生が記された会報第 43 号をお読みいただきたいが、お一人お一人のシンポジストは、なにわのスポーツを大切にされる方であった。バレーボールの佐藤忠明先生（佐伯先生の紹介）からは、ご自宅で貴重な資料を拝見できたことが忘れられない。ボートの大和晋先生からは、びわこ成蹊スポーツ大学ボート部コーチ田中重次郎氏（メキシコオリンピック出場選手）や大阪市立大学OBのご尽力でお話を拝聴できた。ラグビーについては前田嘉昭先生（溝畑先生の紹介）から花園ラグビー場の歴史、全国高校ラグビーに関する貴重な資料をいただいた。福祉の専門家（アダプテッドスポーツ）である高橋章先

生には大阪体育大学出身ということで矢部京之助先生、伊藤章先生のご尽力によりお目にかかることができた。

特別講演の來田享子先生とは、電話で失礼とは思ったが何度か連絡をとらせていただいた。その連絡がスムーズだったのは、ひとえに北田和美先生のお人柄によるものである。

展示イベントの中心は、田中譲先生である。歴史をひもとく資料の仕事量、パネルの作成、大阪産業大学での打ち合わせにおいてその大変さが伝わってきたものである。

シンポジウムⅡは、佐川和則先生、講師の先生方の学問的背景が生み出したものである。最後に忘れてならないのは会場校であり前理事長溝畑寛治先生、全てに関わられた灘英世先生である。精力的に大会のために労力を惜しまれなかった。後藤幸弘会長がおっしゃっていた‘なにわの底力’が見事に発揮された。伊藤章先生と同じように、感謝、感謝である。

知の世界のプレイボーイである梅棹忠夫博士は、次のような言葉を残されている。何事も、かきとめておかなければ、すべては忘却のかなたにおきさらされて、きえてしまう。歴史は、だれか他人がつくるものではなくて、わたしたち自身がつくるものだ。わたしたち自身が、いまやっていることが、すなわち歴史である。(『梅棹忠夫著作集 第22巻』 38ページ)

大阪体育学会の歴史的にして感動的なイベントにイベント部会長という役割をあたえられて関わることができた。その感動を、感謝を忘れてはならないと蕪辞をつらねた次第である。